

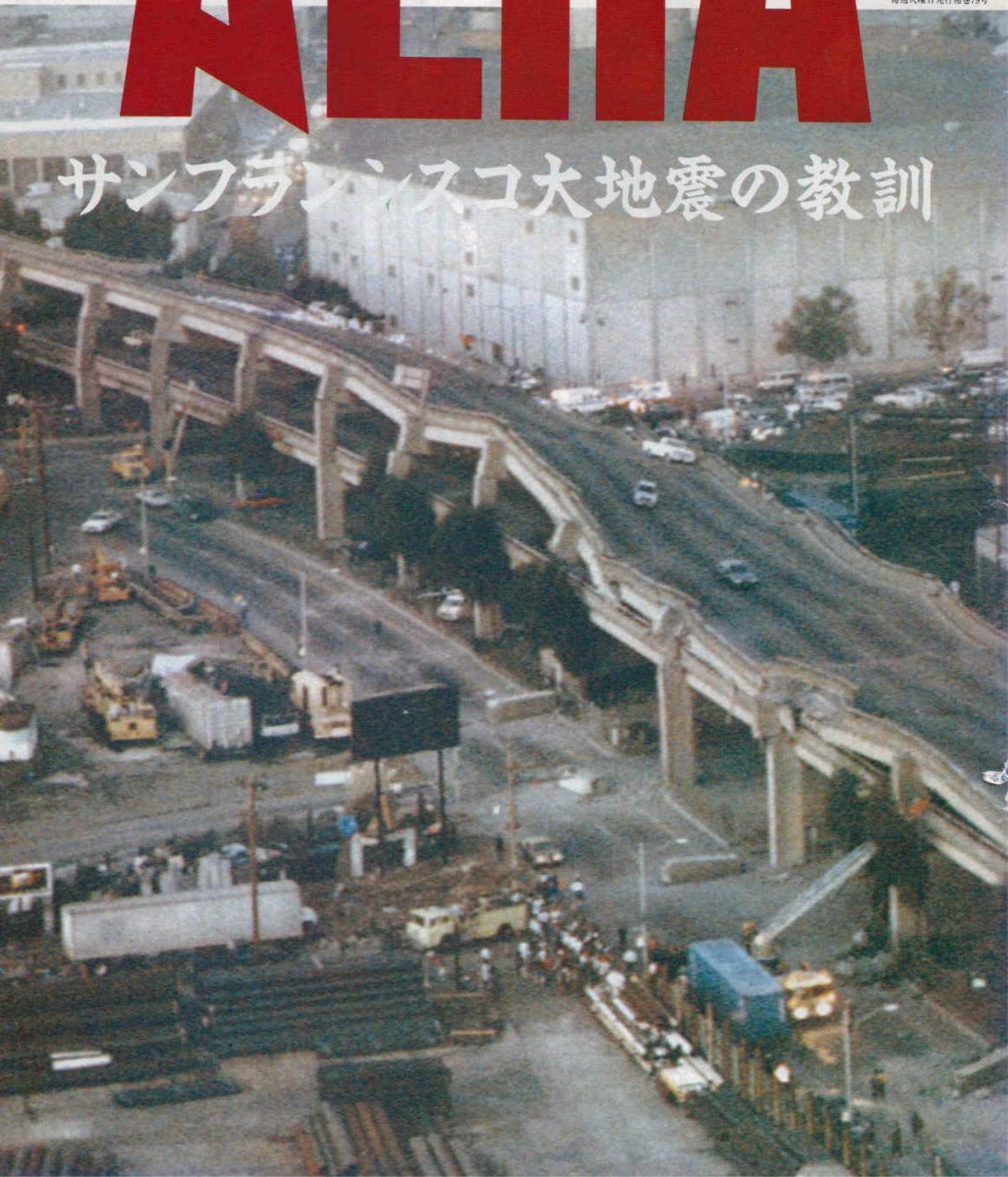
朝日新聞WEEKLY

# AERA

アエラ  
No.47  
10.31

定価310円  
昭和53年6月10日第3種郵便物認可  
毎週火曜日発行通巻79号

サンフランシスコ大地震の教訓



# AERA

1989.10.31

Vol.2 No.47

●表紙  
アートディレクター 戸田正寿  
Masatoshi Toda  
ネーミング 真木 準  
Jun Maki

●本文  
アートディレクター 東 盛太郎  
Seitaro Higashii

©朝日新聞社 1989

## SPECIAL

## 特報 シスコ地震その日その後

「水辺都市」の震災を見た	6
コミュニケーションの闇	9
Wシリーズ球場、激震の音が響いた	10
されど「わが町」マリーナに住む	12
ウォーターフロント開発への教訓／まだまだ 起きる大地震／公共投資を怠った人災	14

## 「防波堤」を崩した東独の激流

ホーネッカー18年体制終焉の後にくるもの	18
----------------------	----

## さらば「金丸・竹下商店」

石原慎太郎「反主流派宣言」の肉声	21
------------------	----

## 日本は世界相手に喧嘩するつもりか

韓国雙龍グループ会長にインタビュー	24
-------------------	----

## 津々浦々の田園交響楽

クラシック音楽堂がお国自慢の町	32
-----------------	----

## 北米産シシャモ、ポテトの日本制圧

## 「週休4日制」の泣き笑い

企業側が「休んでくれ」という時代	66
------------------	----

## AERAリポート

パチンコ騒動 いよいよ政争の具の様相を見せてきた「疑惑」	20
------------------------------	----

中国 陳雲氏ら保守派がついに鄧小平路線の見直しを要求しました	26
--------------------------------	----

大望遠鏡 なかなか実現しない「宇宙の果て」に挑戦の7.5m鏡計画	27
----------------------------------	----

市民ジャーナリスト 核戦争防止国際医師会議に参加した臨時特派員	28
---------------------------------	----

究極の習い事 人形教室からも作家が生まれる	36
-----------------------	----

マヤ遺跡 中米5カ国の自然破壊で危機、メキシコなどが保存に力	50
--------------------------------	----

ガリレオ 木星へ飛び出した探査機が地球でなめた「苦労」	70
-----------------------------	----

野鳥公園 鳥にも人にも「大東京のオアシス」になるのだろうか	71
-------------------------------	----

輸入フェア 「輸出企業、が『輸入企業、に早変わりした事情	72
------------------------------	----

古墳 福岡県豊津町で発掘された遺跡が思い出させる「海幸山幸」	75
--------------------------------	----

## ノンフィクション

現代の肖像 冒険家の聖と俗・青木洋 守 誠	53
-----------------------	----

## 明解現代講座 スーパー特派員・亞江良十三

「核実験協力のツケを払わされる国」さいとう・たかを +アエラ・プロ	58
-----------------------------------	----

●先週今週	62
-------	----



「決意した」石原慎太郎



ヨット人生・青木洋



こうした地震惨事に備えはあるのか



米ポテトの「日本制圧」



ホーネッカー時代終焉

●データベース 「見る見るわかる」  
史上空前、日本のゴルフ人気 38

## ●VIA AERA

「ギャルのおじさん化=女子大生ゴルフ熱」「一芸に秀でたモデル求めます」「これは何だ！道に天の川が光る」ほか	42
---	----

## ●AERA INDEX

国内経済指標	61
--------	----

## ●てがみ

編集長敬白	76
-------	----

## ●レンズ通信

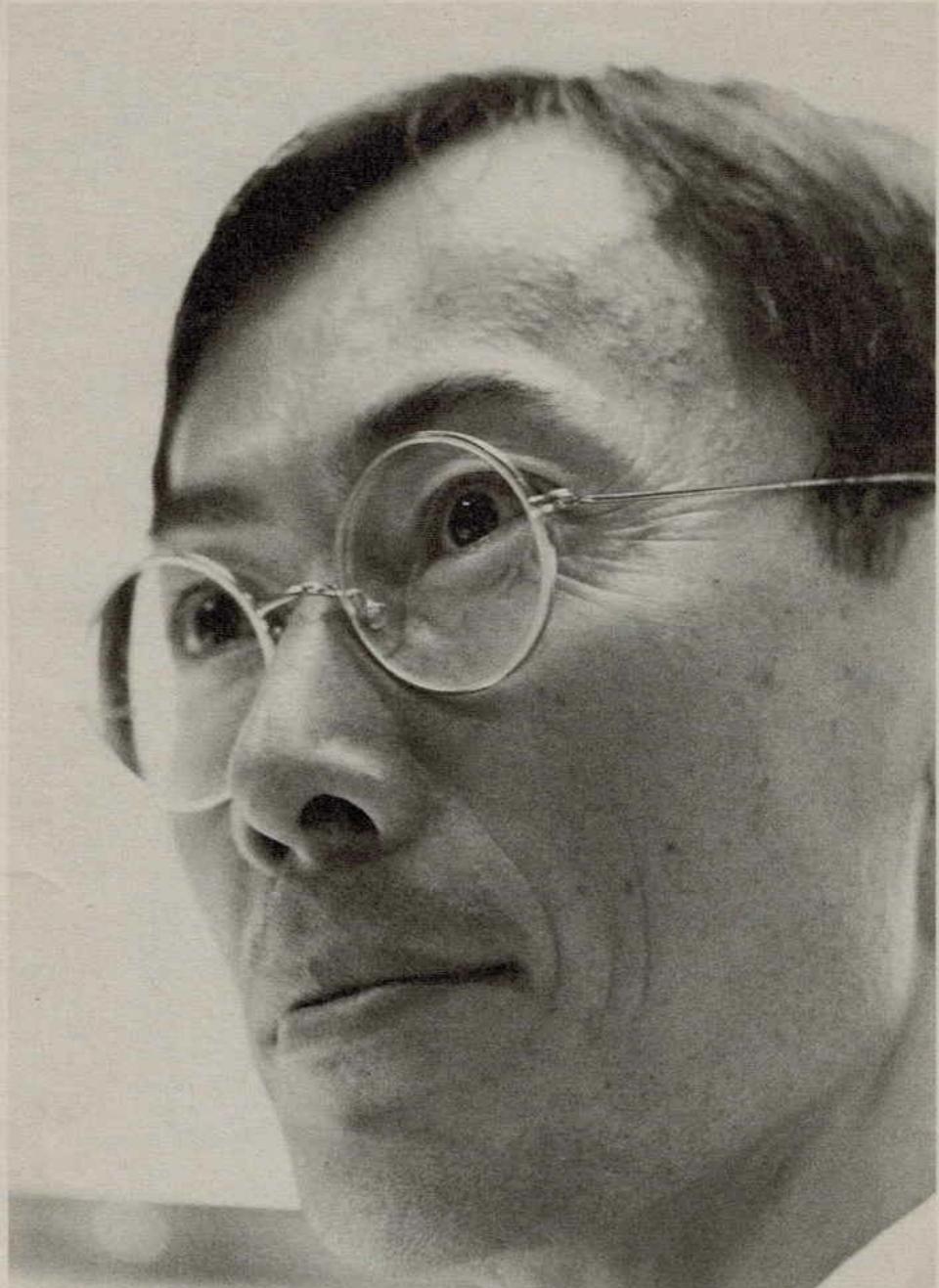
子供を射撃教室に連れていく親たち	78
------------------	----

マリーナ・プランナー 青木 洋さん

あお よう

# 冒険家にならなかつた冒険家

ドキュメンタリー作家 守 誠 写真 太田順一



なぜ、大学へ行つて勉強しなければならないのか。

深刻に悩む彼に、その答えを教えてくれる人はだれもいなかつた。ある日、沖に浮かぶ白いヨットを見かけた。

海の向こうに「生きる意味」が見つかるかもしれないと思つた。そして、世界一周を成し遂げた。だが、そこにも探し物はなかつた。

今年の大阪の空は、どこか狂っていた。夏の終わり、私とその男がタクシーに乗り、雨が何本も何本も太い束となつて落ちてきた。光が走る。轟音が耳を突き刺す。タクシーのワイパーはキックキックと息苦しめ音をたて、まるで気が狂つたように打ちつける雨を払いのける。やがて私たちは大阪万博跡地にある池のほとりにたどり着いた。

この日は万博跡地の公園は休みで中に入れない。雨は無数の水柱となって視界を閉ざした。窓から目を離すと池の向こう岸に目指すものが見える。そこには全長六・四メートル、幅二メートルのヨットがあつた。

男がタクシーを降りる。私も後を追う。僕は役立たず、あつという間に靴やズボンの裾が水浸しとなつた。

だが、男はそんな雨をまったく意に介さぬかのように池の対岸を見つめている。

ヨットの名は「信天翁」(世号)。

男の名は青木洋。手づくりヨットで世界一周を成し遂げた冒険家である。ヨットは十五年前、世界一周の後、大阪万博跡地に寄贈された。自分の冒険を世の人々、とくに子供たちに伝えようとしたのである。青木が、「信天翁」(世号)を見にきたのは、この日が三年ぶりのことだった。

荒天の中、ベニヤ張りの手づくりヨットを眺める青木は何を考えているのか。ホーイン岬沖で嵐と闘つた決死の航海か。あるいは帰国後の虚脱感と精神的な苦悩にさいなまれたその後の人生か。

寡黙な青木は何もしゃべらない。ただ、ヨットをじっと見つめている。色白で一八〇センチを超える長身の青木は、ふだんは丸ぶ



青木は深く「生きる意味」を求めた。答えは、意外なところにあった。青木はある夜、ひとつの夢を見た。

「私は夢の中で、もう一人の私」に出会つたのです。その「もう一人の私」は、自分にこういっています。「冒険に出なさい、冒険に」と。そして、自分はこの「もう一人の私の」言葉に従つたのです。そそのかされたのですよ」

一年と六ヶ月を費やして、二隻百のバラストつきのヨットを完成させた。

「信天翁二世号」の誕生である。

さっそくテスト航海へ。大阪から伊豆諸島技術はまったく、心もとないものだった。

「冒険のようなくだらないことはおやめな

さい。そういうてやるんです。本当に冒険に出る人はどんなに止めても行くもんですよ」

彼自身がそうだった。冒険でも無謀でもない、「生きる意味」を探す「聖なる旅」だったのだ。

一九七一年六月十三日、青木は大阪を出

た。七四年七月二十八日までの三年余りに及ぶ東回り約六万キロの長旅が始まったのだ。まずアメリカのサンフランシスコへ。

そして、メキシコ、ガラバゴス群島へ。次は、ボリネシア三角形の南東端に位置するイースター島に寄港、魔のホーン岬へと向かった。

「ホーン岬に二十一日（六・四）の小型艇で挑戦した人はまだいなかつたんです。九割は失敗するにちがいない。それがイースター島を出発したときの実感だつたんですね」

失敗率九割とは、死ぬ確率が九割だったということだ。ホーン岬にさしかかる三日前、巨大な嵐に襲われた。うねりは崖のような斜面となり、頂上では巻き波が崩れはじめた。真夜中。ドドーン。大音響とともに信天翁二世号は巻き波に呑み込まれてしまった。ヨットは完全に裏返しになつた。

「冒険」という言葉はたしかに響きがない。だが遭難を伝えるための無線もつけた。無線機、方向探知機、エンジンといつた、およそ科学器具らしきものは「一切ない」のです。

青木洋は運を天にまかせた。

「次の瞬間、また恐ろしい衝撃を受けたんです。もう本当にダメだ、ヨットはバラバラになると思いました。ところが転覆したヨットが、再び起き上がつたんです。助かったのです」



「第1回国際マリーナ＆プレジャーボート会議」が9月に大阪で開かれ、米、英、豪から100人が出席した。ふだんは物静かな青木だが、司会進行をつとめ、講演では世界一周の体験を披露した



周囲からチヤホヤされる一方で、青木の心中では、自己崩壊ともいべき現象が起きていた。

青木は、京都のお寺で聞かれていた坐禅の会に足を運んだ。五年近くつづけたが、「いくらやっても悟れない、悟りは死ぬまでない」と諦めた。

知り合いの勧めで、京都の柳田宗矩（東千家）に、お茶の手ほどきを受けた。

「毎週土曜日、午前六時に家を出て、六年間通いました。お茶はものすごく好きになりましたね」

「三年ぶりに日本に帰ってきたが、探し物は結局、見つからなかつた。帰ってきてから十年近く、人とうまく付き合えないといつた（冒険）後遺症に悩まされていたんで

青木にとつてお茶の世界は、一種のミニチュア社会だった。人々との交わりを通じて、社会復帰のためのリハビリを積んでいたのだ。しかし、人とうまく付き合っていないという後遺症は、なおもつづいてい

ビジネスの世界へ方向転換

てていた。「信太翁」(世号)の数倍も大きなヨットづくりの準備を完了、すでに船底につけるバラスト製作からスタートは切らっていたのである。

青木洋による第一の大冒険の宣言は、青木ファンの歓喜の声をもって迎えられた。バラストは鉛を原料として作られる。鉛を木型製作が必要になる。

五年ほど前、トタン小屋の中の人を集め  
て、バラストづくりの儀式(儀式)が行われた。ド  
ラム缶(缶)の中では、鉛の塊(塊)がドロドロに溶か  
されていた。その溶かされた鉛が、何力目  
かかけて製作された木型に注ぎ込まれた。  
青木洋の二回目の大冒険の門出(門出)を祝おう  
と集まっていた者たちは、バラスト(バラスト)が  
出来上がっていく様を見ようと、木型を凝  
視していたのである。

青木は、俗人の世界に入っていた。金繕いの必要性、銀行との付き合い、顧客に対する笑顔等々。ビジネスの世界は青木にとって、まったく未知の世界であった。

誰かが叫んだ。煙が小屋の中に充满していった。木型が燃えている。鉛が外にこぼれ落ちていた。

康子は和歌山大学卒。日本女子大学大学院修士課程修了のインテリ女性だ。片や青木は高校卒の貧乏人ひんぱくじんである。しかもヒゲをはやし、ゲタをはいていた。和歌山県の

「青木さん、この結果をどう思いますか」「鉛にきて下さい」

名門企業、和歌山魚市場の会長を務める康子の父親も母親も、娘の結婚には猛反対だった。

青木の無念さが伝わってきた。儀式は閉じた。バラストづくりは失敗に終わつた。こうして二回目の大冒険の夢は、あまなく潰え去つた。そしてこれが「聖」の世界を生きつづけた青木の人生の転換点となつた。

彼らは研議にしようと青木のもとに便  
いを出した。その使いの人は、青木のヒゲ  
とゲタを攻撃した。青木は相手のその手に  
はのらなかつた。

青木はヨットの修理業で生計を立てていた。

「よし、わかった。あとはワシにまかせておけ。ただ、そのヒゲだけは剃<sup>そ</sup>ってほしい」

「一銭でもヨツトでカネを稼ぐ以上、ヨツト哲学や冒険などについて格好いいことを語る資格はない。中途半端ちゅうじゅんはんぱは許されない」

とき、青木はビジネスの世界を選択した。（前編）

も影をひそめていた。ヨット修理業も力ナディアン・カヌーの販売も順調に進んだ。いま、全精力を注ぎ込んでいるのがマリーナ・ブランナーの仕事である。

青木は大航海中に寄港した世界のマリーナの見聞を通じ、ヨットマンにとってどんなマリーナが使い勝手がよく、人間と海とを結び付けるのかを皮膚で感じとつきた。国内でもヨットの出張修理で、あちこちのマリーナを見て回った。青木はいう。

「いま、わが国の娯楽用ボートは二十六万隻。二〇〇〇年にはだいたい、いまの一倍から四倍。ところが、マリーナは公共と民間を合わせて三百六十八港。収容能力は合計で四万五千隻。これでは、まったくの不足です」

具体的な数字をポンポンあげた。

昨年十月、運輸省は二〇〇〇年までに、あと三百七十港のマリーナを新設する計画をぶち上げた。青木はこの時代の流れを的確につかみとり、昨年、マリーナ事業研究会（略称MBS、在大阪）を発足させた。

青木の口から吐かれる数字を耳にしなが

「自分がやるうとしていることは、海を通じて、『自然の異さ』を日本人に伝えることではないでしょうか。海で風に遭えば陸上の肩書きはまったく役に立ちません。自然を恐れることにより逆に、人間は本来自分にそなわった『野性の力』を取り戻すことができるんです。私は航海の途中、陸上からまだ百キロも離れているのに、いろいろな臭いを嗅ぐことができました。メキシコは

麦わらの臭い、ニューカレドニアは甘い香りでした。近眼でも目がよく見えるようになりますよ。そうしたことを実現するため、マリーナ・ブランナーになることを公に宣言したのです」

青木には、ひとつめの夢がある。それはやはり「冒険」だった。

「自分がやるうとしていることは、海を通じて、『自然の異さ』を日本人に伝えることではないでしょうか。海で風に遭えば陸上の肩書きはまったく役に立ちません。自然を恐れることにより逆に、人間は本来自分にそなわった『野性の力』を取り戻すことができるんです。私は航海の途中、陸上からまだ百キロも離れているのに、いろいろな臭いを嗅ぐことができました。メキシコは

麦わらの臭い、ニューカレドニアは甘い香りでした。近眼でも目がよく見えるようになりますよ。そうしたことを実現するため、マリーナ・ブランナーになることを公に宣言したのです」

青木には、ひとつめの夢がある。それはやはり「冒険」だった。

## 本来ある野性の力を取り戻す

「いま求められている冒険とは、『内なる冒険』だと思います。小さなヨットで世界一周するといった、外なる、冒険の時代は終わったと思います。世界一周の途上、

イースター島に立ち寄ったときのことです。あの島では、『海から来た者はみんな酋長の息子』といって、酋長の小屋に寝泊まりさせてくれるんです。私は二ヶ月ほどそこで暮らしました。言葉も生活もまったく異なる環境の中で知ったのは、彼らがいかに恵みを与えてくれる海を大事にしているか、また、いかに海からやってくる周辺の人たちを大切にしているか、ということです。海を通じ、国家、国境などにとらわれない新しい価値観を創造していく、内なる冒険に出たいのです」

青木の新しい「内なる冒険」への熱い思いが秘められている。

（文中敬称略）

もり 守 まこと 誠

1933年、横浜に生まれる。元商社マン。現在、帝國女子短期大学助教授。国際交流セミナー世話人。「日本海時代の祭典」など各種イベントを手掛ける。著書に『華麗なる恋愛族』『水道——蛇口からの警告』など。



いつか君とこんな街を  
歩いてみたい。



日本団体生命

本社 〒150 東京都渋谷区東1-2-19  
☎03(407)6211(大代)

青木の夢の開拓であった。

「聖なる世界」に生きていた時代から、「俗の世界」を生きることによって、青木はひとつの境地に達したのだろう。青木の長男の名は「周」。地球を何周も回る意味だという。

